

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01297

研究課題名（和文）古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築

研究課題名（英文）Elucidating the Actual Conditions of Late Antique Defensive Settlements and Reconstructing the History of Northeast Asia, Including the Northern World of Japan in the Medieval Transition Period

研究代表者

小口 雅史（Oguchi, Masashi）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本科研においては、実態が不明確であった、古代末期から中世にかけて北東アジア世界に共通して存在した防御的性格を強く有した集落について、様々な手法を援用しながら、その実態に迫ることができた。そうした集落の詳細な構造や立地の具体的な解明によって、防御的側面が強くあることは確実に became。また一方で集落の構造には様々なパターンがあることも確実に became、それぞれの集落が背負っている背景を明らかにすることにも務めた。最終的に北海道を中心に大陸との直接の交流を示す遺物が多く存在することを明らかにでき、こうした集落の成立に、北方世界の顕著な特徴とみなすことができる交易と交流があることを証明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代末期から中世成立期にかけての北方世界に関する文献史料は少ない。存在するものも多くは中央の視点で書かれたものである。しかしこの時代の北方世界においてはそうした史料には登場しない、防御的な集落が存在することを示すことができた。こうした防御性については今なお学界で懐疑的見解が存在するが、本研究によって、その存在は確実に became。これによって日本史における多様性を重視する、「もう一つの日本」論をさらに進めることを実現し、交易と交流によって栄えた北方世界の実態について、新しい光を当てることとなった。その論証過程においては南北の流通状況を詳細に解明でき、これまでの研究の欠を補うものとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we were able to approach the reality of settlements with a strong defensive character that commonly existed in Northeast Asia from the Late Antiquity to the Middle Ages, the actual conditions of which were unclear. The detailed clarification of the structure and location of these settlements has confirmed that they were strongly defensive in nature. At the same time, it also became clear that there were various patterns in the structure of the settlements, and we were able to clarify the background of each settlement. Finally, we were able to identify a large number of artifacts that indicate direct contact with the continent, mainly in Hokkaido, and we were able to prove that trade and exchange, which can be regarded as a prominent feature of the northern world, were involved in the establishment of these settlements.

研究分野：古代中世北方史

キーワード：防御性集落 防御的集落 要害内集落 交易と交流 須恵器 鉄器 ガラス玉 北の内海世界

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本列島内における多様な地域文化の存在を示し、「日本」像を見直す研究が活発になって久しい。とくに列島の北端地域の史的展開過程については「もう一つの日本」という名の下、「中(なか)の日本」の在り方とは異なる特色が次第に明らかにされつつあった。北方地域は津軽海峡によって地理的に二分されているが、この海峡は「交易と交流」上の障害となっていたわけではなく、「北の内海世界」と呼ばれる一衣帯水の地域であった。さらに北日本世界が宗谷海峡・間宮海峡を越えて、あるいは日本海航路を通じて、サハリンから大陸沿海地方とも深い交流関係にあったことも解明されつつあった。時期的にはアイヌ文化の成立を挟んでその前後にわたることは確実である。海峡を交流の重要な通路とする「北の内海世界」がさらに北に広がっていて、古代から中世まで一貫して絶えまなく続いた「交易と交流」が、北日本世界あるいは「中の日本」にどのような影響を与え、それが古代から中世へという歴史の大きな転換にどう関わったのかを解明することが、新しい課題となっていた。

(2) 古代から中世の北東アジア域内の各地方勢力にとって、その地域の特産品は権威・財力の獲得と権力の維持・発展のために欠かせないものであり、その獲得は死活問題であった。こうした状況下で日本列島北部・サハリン・アムール・沿海地方のアイヌを含む諸集団はそれに積極的・主体的に対応して特産品の生産を拡大・強化していた。そして北の内海世界を結ぶ巨大な物流システムが形成され、社会組織の変革が実現した可能性があるかもしれない。こうした巨大な物流システムが形成されたことを端的に示す可能性があるのが、この地域における、集落を壕などで囲郭した、防御的な環壕集落の出現である。

こうした防御的集落は、10世紀から11世紀ころ、北緯40度以北の北日本からサハリン、大陸沿海地方に広く存在する。こうした事象の出現は、歴史的に相互に関係性を有していると考えられ、北東アジア世界を総合して検討する視点がようやく可能になってきた。防御的な集落が、同じ時代に北東アジア各地で誕生したことは決して偶然ではない。交易と交流の拡大は、富の略奪にもつながり社会の不安定化と密接に関わるからである。防御的集落の同時発生に共通の背景があることは間違いない。

(3) この問題が具体的に解明されれば、日本についていえば、北東アジア世界における北日本世界の位置づけを明確にすることが可能になり、真に「もう一つの日本」の歴史として、「中の日本」の歴史に対峙させることも可能になる。そればかりか「もう一つの日本」が「中の日本」にどのように作用して、古代から中世への変容を実現させたのか、この日本史上の重要問題の一つに迫ることすら可能になるはずである。また当時まだ「日本」ではなかった北海道の位置づけ、さらにはサハリンから沿海地方を含む一つの世界が大陸本体とどのような関係にあったのかまで明らかにすることができ、当該地域の歴史像の革新につながると考えていた。

### 2. 研究の目的

(1) 上記の研究開始当初の背景に基づく問題関心から、まずは北東アジア世界におけるさまざまな防御的集落の実態解明を目指す。そしてそれらが確実に防御的性格を持つ集落であることを明らかにし、その年代観や特質を解明する。単に防御的性格の有無だけではなく、様々な集落形態の存在を解明する。併行して、アジア地域間の交易と交流の実態を、動いたモノに即しながら解明する。こうした作業の繰り返しによって、北東アジア世界全体の特質とともに、それを構成する諸地域の特質をも、時間軸を追いながら解明していく。結果として、古代末期から中世成立期の北東アジア世界の地域区分と、その歴史的展開の再構築を可能にすることを目的とする。

(2) こうしたこれまであまり知られていなかった北方世界の実態へ注目する研究は従来も存在したが、それらは個別の視点によるものであって、それらを総合した、北方世界の全体像の構築は十分にはなされていないが、内部構造を具体的に解明して論理化可能な段階にまできている。例えば北海道において社会的にもっとも重要な必需品として時代を問わずに求められていたはずの鉄器類(ないし素材としての鉄)が、どこからもたらされたのかについてすら想定の出発点を出ていないし、土器の交流についても、たとえば北海道出土の須恵器については青森県五所川原窯産という事実ばかりが目立され、他の須恵器については未解明である。防御的集落についても立地と形態に多様性を認めるべきことが明らかになってきているが、地域ごとの機能や特性を比較検討した研究はまだない。さらにはそれらを総合して文献史学の成果と融合させることが、歴史学研究である以上、重要な問題となるが、北方世界特有の文献史料の稀薄さが障害となっていて、まだまだ検討の余地を多く残している。本研究は以上の問題点を、「北の内海世界」の拡大という北東アジア地域全体を見通す新たな比較の視点にたって、従来の個別の視点を統合し全体像を新たに描き出していくことで、解決することをも目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、これまで存在した個別の先行研究について、あらためて統一的視点から再検討し、総合することを目指す。

(1) まず北東北を中心とし、さらには北海道、サハリン、大陸沿海地方に存在する防衛的構造を持つ集落の事例集積に努める。囲郭形態や立地等が多岐にわたることが少しずつ明らかになってきているので、各地域・各集落の実態に即して、機能や性格等を再評価してることが重要になる。そこで、地域単位または集落群単位で、集落動態や集落構造変遷に関する分析を行い、一連の変化のなかに防衛的集落を考古学的に位置づけていく。

とくに 岩手から秋田にかけて存在する高地性集落については、かつて防衛性集落と考える見解が示されてはいるが確認は得られていないので、両者の関係を確定させる。また現地の研究者の情報も収集する。日頃から現地を踏査している研究者と交流し、未発見の防衛性集落・高地性集落の発見に努める。事前に収集した情報では、かなりの数の遺構が山間に眠っていて、なかには巨大な構造を持つことが推定されるものがある。

また大陸沿海地方の複数の山城、サハリンのペロカーメンナヤ遺跡など、ロシア極東の遺跡についても北日本の防衛性集落との共通点を視野に入れながら再評価する。

(2) 出土遺物について基本的なデータを集積する。北海道の須恵器については、産地不明のものが多いが、蛍光X線分析を試み、交流関係を確定させる。鉄については本州由来説と大陸由来説が鋭く対立しているが、成分分析だけでは解決困難な面もあり(同じ分析対象について、分析方法によって全く異なった見解が得られている)、広く東アジア全体を見渡した事例集積を続けることによって、交流の実態を明らかにする。

(3) これらの作業を総合する作業を、各年度初めと年度末との全体会にて実施する。最終的には各班全体を通じる関心として、北東アジア世界の地域区分解明、本州から沿海地方に至る海峡を繋ぐ北の流通ルートの解明(北の内海世界の拡大)、それに関連して沿海地方から「中の日本」に至る交流実態の解明、さらには精神文化(ガラス玉等)と物質文化(土器等)の交流の差異の解明をめざし、これらによって多様な北東アジア世界の实態を明らかにしていく。

#### 4. 研究成果

##### (1) ロシア極東地方における防衛的集落の存在確認

コロナ禍以前の2019年度には、幸いにしてロシアのウラジオストク周辺の山城的な遺跡を精力的に踏査し、日本北方世界の防衛性集落との比較を行うことができた。具体的にはポリソフカ1山城、シニエリニコヴォ1山城、ゴルバトカ城跡、アウロフカ山城、アヌチノ山城、ノヴォゴルディエフカ山城、コクシャロフカ1城跡、コクシャロフカ8遺跡、コクシャロフカ2遺跡、チュグエフカ城跡などについて、日本の防衛的集落の構造と比較した。結果としてロシア沿海地方の防衛的な集落は、具体的な施設や規模は異なるものの、その構造や特徴など、明らかに日本北方世界の防衛性集落と共通点があることを確認できた。その立地は明確に防衛を意識したものであり、かつ交易の要衝に位置するものも多い。防衛的集落発生の背景に交易があることは間違いないとの結論に至った。

またサハリンについてはコロナ禍の襲来と、ウクライナ戦争の勃発によって現地入りが不可能になってしまったが、旧北海道開拓記念館(現北海道博物館)の調査隊が調査した際の遺構や出土品の膨大な写真を今回デジタル化して精密に再検討することによって、やはり要害を意識した防衛的集落であって、沿海地方と同様の傾向があることを確認することができた。

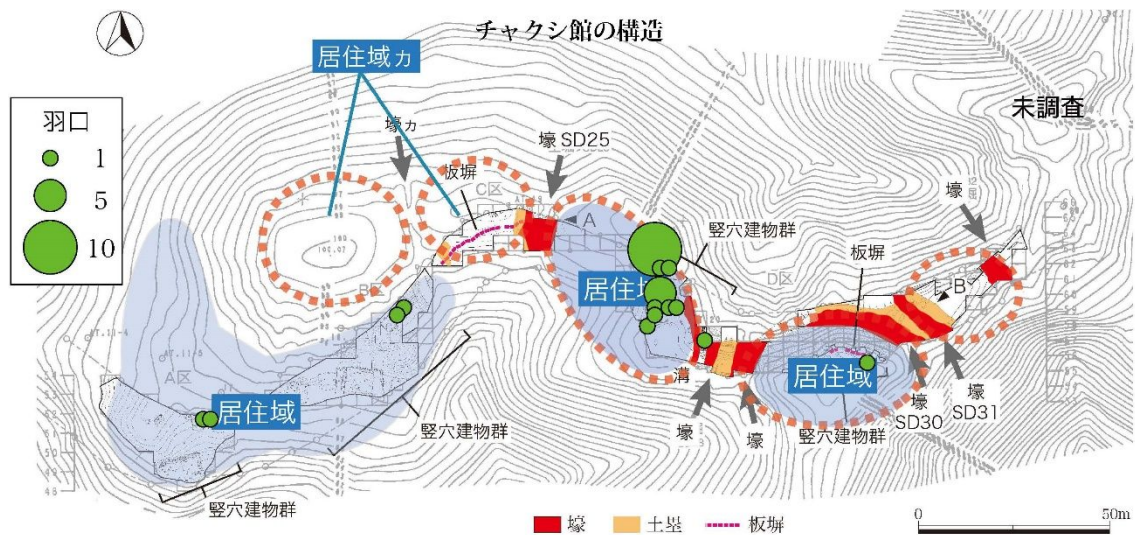
##### (2) 北日本における防衛的集落の新発見と精密な実測図の作成による構造解明

北日本における防衛的集落については、まず、これまで存在は知られているものの、精密な調査が及んでいなかった岩手県内の山間集落について、その実像を詳細に描き出すことに重点を置いた。対象としたのは暮坪遺跡、子飼沢遺跡、黒山の昔穴遺跡、外久保遺跡、長興寺遺跡等である。その性格についてはこれまで様々な見解が出されているものの、踏査の結果として、遺跡相互の位置関係をも踏まえながら、その防衛的性格が十分認められることを確認した。生業に規制された山間生活のための遺跡というよりはやはり防衛的性格が濃厚である。さらに現地協力者による精力的な踏査によって複数の遺跡が発見された。

さらに故工藤雅樹氏が発掘調査を実施しながら未報告の岩手県内の高地性集落について、福島大学菊池研究室を訪問して、詳細な調査記録を閲覧させていただいた。それによりこれらも同様の性格を持つ小規模な高地性集落であることを確認した。

また岩手県滝沢市千ヶ窪・遺跡を選定し、高地性集落として初の「遺構くん」システムを利用しての精密なデジタル測量を実施し、その性格の分析のためのデータを得ることができた。

さらに秋田県については能代市のチャクシ館跡・加代神館跡、大館遺跡、田沢湖町古館遺跡（のちに相内沢遺跡と改称）を対象として、詳細な現地踏査を実施した。結果として、とくにチャクシ館跡について、これまで知られていた以上の複雑な構成を持った（複数の居住域をつなげたもの）、強度の防御的性格を有する山間集落であることを確認できた。一見中世城館にも匹敵する規模と構造であるが、表採される遺物は間違いなく古代末期のものである。これは新発見と言って良い成果である。



さらに古館遺跡（相内沢遺跡）については、山間におびただしい数の竪穴を広範囲にわたって確認することができ、防御性集落とひとくくりには見えなくなる遺跡の存在を確認した。また北海道については、主に北海道博物館所属メンバーのこれまでの踏査を踏まえて、北東北との比較を行ったが、チャシとよばれる遺跡のなかで、防御的性格を強く持つもののなかには、一般にチャシに与えられる年代観である近世ではなく、中世にまで遡るものがあることは確実に、北東北の防御性集落との類似性を指摘することができた。

### (3) 北方世界の防御的集落の諸様相の解明

以上のように、ロシア沿海地方、サハリン、北日本地域には防御的集落と総括できる遺跡が普遍的に存在するが、その構造には様々なパターンがあることが確実に。いずれも交易と交流を背景にした遺跡であることは共通するが、その交易と交流の内実が、遺跡の構造の違いを生み出している。詳細は今後の検討を待つ必要があるが、北方世界の多様性を具体的に描き出す鍵になる可能性が高いことは確かである。

### (4) 交易と交流の諸様相

北方世界で同時期に防御的集落が発生した背景にある交易と交流について、北海道内出土品を中心に検討した結果、これまで不明とされた道内出土須恵器が、青森県五所川原窯だけではなく、秋田の須恵器窯とも深い関係にあることが明らかになり北東北各地と交流を持っていたことが明らかになった。また道内で出土する特殊な製品について検討した。とくに目梨泊遺跡出土の刀剣・刀装具について、刀装具に彫られた宝相華文の様式は契丹の耶律羽之墓出土資料に類似した例があり、日本国内で製作されたとは考えにくい。本資料の年代について、従来C14年代測定値を根拠に9世紀代としているが、この文様が9世紀代とすると従来の宝相華文の年代観と大きく齟齬を来す。従来の宝相華文の年代観では、本資料は10世紀代と推定できる。以上の点から、これらの遺物は防御性集落発生背景にある交易品とみなすことが可能になった。また大陸との関係でもこれらの資料は10世紀代に契丹の影響を強く受けた沿海地方から目梨泊遺跡に渡来したパクロフカ文化期の資料と考えられる。旭川や余市の刀剣調査でもこうした論点を補充した。大陸との活発な交易が存在したことを具体的に証明できた。これは(1)～(3)の結論を補強する結果となった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 八木光則・小口雅史・岩井浩人・井上雅孝	4. 巻 34
2. 論文標題 滝沢市千ヶ窪遺跡の測量調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岩手考古学	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木光則	4. 巻 232
2. 論文標題 いわゆる末期古墳の系譜と変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 147-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木琢也	4. 巻 7
2. 論文標題 平泉無量光院跡出土の擦文土器 - 擦文文化集団と平泉の集団の交流についての予察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤淳	4. 巻 30
2. 論文標題 古代集落と土器文化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 青森県考古学	6. 最初と最後の頁 108-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上雅孝	4. 巻 10
2. 論文標題 無量光院跡出土の土器は擦文土器か？ 平泉出土擦文土器の系譜と年代について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩手大学平泉文化研究センター年報	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 -
2. 論文標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡における日露共同調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『北陸と世界の考古学：日本考古学協会2021年度金沢大会資料集』	6. 最初と最後の頁 105-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 -
2. 論文標題 クラスキノ城跡の上層遺構	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『渤海を掘る 予稿集』	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 -
2. 論文標題 クラスキノ城跡の城壁に関する基礎的整理	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『渤海「日本道」に関する海港遺跡の考古学的研究 - クラスキノ城跡の発掘調査を中心に - 』	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 -
2. 論文標題 平安時代の環壕集落（防御性集落）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『青森の考古学』	6. 最初と最後の頁 120-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 10
2. 論文標題 ロシア沿海地方における渤海の領域について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 纏向学研究	6. 最初と最後の頁 659-665
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 25
2. 論文標題 瓦当文様の変遷から見た渤海王都の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 唐代史研究	6. 最初と最後の頁 37-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 124
2. 論文標題 An examination of the capitals of Po-hai based on research on changes in antefix motifs	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ACTA ASIATICA	6. 最初と最後の頁 37-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋芳孝	4. 巻 13
2. 論文標題 クラスキノ城跡出土石帯の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社大学考古学シリーズ	6. 最初と最後の頁 533-542
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小口雅史・小嶋芳孝	4. 巻 149
2. 論文標題 ロシア沿海地方、一〇世紀代の平地城・山城踏査について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 弘前大学国史研究	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小口雅史・八木光則	4. 巻 97
2. 論文標題 岩手県の高地性集落 (山地集落) の踏査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法政史学	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩井浩人	4. 巻 -
2. 論文標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡における日露共同調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北陸と世界の考古学 : 日本考古学協会2021年度金沢大会資料集	6. 最初と最後の頁 105-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する



1. 著者名 鈴木琢也	4. 巻 116
2. 論文標題 擦文文化と奥州藤原氏 - 北日本中世初期の交流史 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌 Arctic Circle	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 巻 2
2. 論文標題 AN ARCHAEOLOGICAL STUDY ABOUT THE ROAD NETWORK OF BOHAI	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 52-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 巻 737
2. 論文標題 ガラス玉研究と北アジア史	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 巻 52
2. 論文標題 クラスキノ城跡の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史友	6. 最初と最後の頁 231-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 巻 343
2. 論文標題 アジア文明博物館の沈没船資料	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川考古学研究会会報	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井 浩人	4. 巻 71
2. 論文標題 北東アジア	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本考古学年報	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩井 浩人・E.I. ゲルマン	4. 巻 36
2. 論文標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡の調査 (2019年度)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青山考古	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 八木 光則	4. 巻 -
2. 論文標題 岩手の古代集落	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究」古代貝塚・集落グループ総括報告会要旨集	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 右代 啓視	4. 巻 378
2. 論文標題 北方四島の歴史・文化を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化財情報	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 右代啓視・鈴木琢也・東 俊佑・猪熊 樹人・天方 博章・ザディラコ, A. L.・イワノヴァ, O. B.	4. 巻 5
2. 論文標題 北方四島における考古・歴史学の総合研究( )	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 149-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 右代 啓視・鈴木 琢也	4. 巻 150
2. 論文標題 2019年北方四島学術調査 国後島ヤンベツ・小田富の遺跡群 .	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 161-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 琢也	4. 巻 -
2. 論文標題 北海道島における本州産須恵器の流通-5世紀~11世紀	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋陶磁学会第47回大会研究発表資料集	6. 最初と最後の頁 9 - 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 美鈴・越田 賢一郎・竹内 孝・中村 和之	4. 巻 53
2. 論文標題 北海道恵庭市柏木B遺跡出土ガラス玉の形態的特徴及び成分分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 函館工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 90～95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20706/hakodatekosen.53.0_90	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 越田 賢一郎	4. 巻 737
2. 論文標題 「タマサイ」と「シトキ」の成立	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 巻 -
2. 論文標題 渤海日本道と加賀能登	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本古代の輸送と道路』	6. 最初と最後の頁 267-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計36件(うち招待講演 24件/うち国際学会 7件)

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 古代の北方世界における交易と交流
3. 学会等名 アルザス欧州日本学研究所(CEEJA)国際学術シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小口雅史
2. 発表標題 「日本」史における北方世界の始まり（古代蝦夷とは何か）
3. 学会等名 アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小口雅史
2. 発表標題 日の本將軍安藤氏の活躍と衰退 - 日本社会の均一化への道程
3. 学会等名 アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）国際学術シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 古代の北方交流と擦文文化
3. 学会等名 2022年度地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡III「北日本の古代史と擦文集落の謎」（札幌市）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 古代の北方交流と擦文文化
3. 学会等名 2022年度地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡III「北日本の古代史と擦文集落の謎」（釧路市）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 北海道へ渡った須恵器と秋田
3. 学会等名 第11回（令和4年度）後三年合戦沼柵公開講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 擦文文化に搬入された本州産製品からみた交流の様相
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館基幹研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化-その成立・展開過程-」第1回研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 本州産製品の流通からみた擦文文化・オホーツク文化の交流
3. 学会等名 目梨泊遺跡出土金銅装直刀の技法材料およびその歴史的背景に関する研究会（2）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤淳
2. 発表標題 東北北部出土の擦文（系）土器
3. 学会等名 国立歴史民俗博物館・基幹研究「交流・環境からみたオホーツク文化・擦文文化、アイヌ文化 - その成立・展開過程 - 」第4回研究会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井浩人
2. 発表標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡における日露共同調査
3. 学会等名 北陸と世界の考古学：日本考古学協会2021年度金沢大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩井浩人
2. 発表標題 クラスキノ城跡における囲郭施設の変遷
3. 学会等名 第1回 渤海考古学シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方四島の歴史・文化の評価
3. 学会等名 羅臼町郷土資料館公開講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 北方四島の歴史文化遺産
3. 学会等名 北海道古代集落遺跡群調査懇談会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 右代啓視、天方博章、久保浩昭、本間浩昭、千島居住者連盟富山支部（15名）
2. 発表標題 座談会「後世につなぐ歴史・文化を語る」
3. 学会等名 富山県北方領土史料室
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 「北方四島における歴史・文化」
3. 学会等名 フォーラム「未来につなぐ北方四島の歴史・文化」富山県北方領土資料室
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 右代啓視
2. 発表標題 未来につなぐ北方四島の歴史・文化
3. 学会等名 北海道博物館公開講座
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 藤優が調査した図們江（豆満江）下流域の渤海遺跡
3. 学会等名 「第一回 渤海考古学シンポジウム」金沢大学 古代文明・文化資源学研究センター
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 瓦当による渤海王都変遷の検討
3. 学会等名 唐代史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古代日本海域における人の移動 - 渤海・日本航路を中心に -
3. 学会等名 北陸と世界の考古学：日本考古学協会2021年度金沢大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 渤海の都城 - 建国から上京までの変遷
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 寺家遺跡から探る古代の気多神社
3. 学会等名 石川考古学研究会11月例会・平安後期のシャコデ廃寺を探る
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小嶋芳孝
2. 発表標題 古代能登・気多神社の祭祀 - 寺家遺跡の調査から
3. 学会等名 東アジア古代都城と都市網の宗教空間に関する 総合的・比較史的研究 - 2022 年度国際会議 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩井浩人
2. 発表標題 ロシア沿海地方クラスキノ城跡における日露共同調査
3. 学会等名 日本考古学協会2021年度金沢大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木琢也
2. 発表標題 北方四島の遺跡と擦文文化
3. 学会等名 第7回カリンバ講演会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中澤寛将
2. 発表標題 考古学からみた渤海とその周辺
3. 学会等名 二国間交流セミナー「高句麗・渤海史に関する日中研究者会議」予備報告会 / 第5回金毓黻と東北アジア史研究会 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小嶋 芳孝
2. 発表標題 从城牆修築過程思考克拉斯基諾城址的歷史
3. 学会等名 東北亜古代城址国際検討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩井 浩人
2. 発表標題 渤海の海港遺跡 クラスキノ城跡の調査
3. 学会等名 学際研究シンポジウム「渤海・クラスキノ城跡と極東アジアの古環境」（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 八木 光則
2. 発表標題 東北古代城柵の構造と機能
3. 学会等名 鞠智城・古代山城シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八木 光則
2. 発表標題 北海道と東北の古代集落の比較
3. 学会等名 地域の文化財普及啓発フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代 啓視
2. 発表標題 アイヌ文化のチャシを考える
3. 学会等名 アイヌ民族文化財団アイヌ文化セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代 啓視
2. 発表標題 北方四島の歴史と文化
3. 学会等名 北方四島青少年交流事業（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代 啓視
2. 発表標題 アイヌ文化のチャシを考える
3. 学会等名 アイヌ民族文化財団アイヌ文化セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 右代 啓視
2. 発表標題 北海道の人類活動史からみたアイヌ文化
3. 学会等名 札幌聖心女子学院課題研究ミーティング（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木 琢也
2. 発表標題 北海道島における本州産須恵器の流通-5世紀～11世紀-
3. 学会等名 東洋陶磁学会第47回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木 琢也
2. 発表標題 北方四島における歴史・文化の解明
3. 学会等名 シンポジウム「北方四島専門家交流の成果とその役割と課題」（主催：北海道博物館・根室市教育委員会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 越田 賢一郎
2. 発表標題 北海道史におけるオホーツク文化の位置づけ
3. 学会等名 チャシコツ岬上遺跡国指定記念シンポジウム オホーツク文化と古代日本（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 八木光則	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 394
3. 書名 古代城柵と地域支配	

1. 著者名 岩井浩人（編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青山学院大学総合研究所	5. 総ページ数 191
3. 書名 『渤海「日本道」に関する海港遺跡の考古学的研究 - クラスキノ城跡の発掘調査を中心に - 』	

1. 著者名 小嶋芳孝、中澤寛将他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 496
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

1. 著者名 小嶋 芳孝	4. 発行年 2023年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 370
3. 書名 古代環日本海地域の交流史	

1. 著者名 小嶋芳孝・大賀克彦・田村朋美・菊地芳郎・稲垣森太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 奥尻町教育委員会	5. 総ページ数 114
3. 書名 青苗遺跡重要資料総括報告書	

1. 著者名 池上悟先生古稀記念会（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 761
3. 書名 芙蓉峰の考古学	

1. 著者名 清水信行、鈴木靖民	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 496
3. 書名 渤海の古城と国際交流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

古代北方史関係研究文献目録データベース（小口 雅史編） <a href="https://aterui.ws.hosei.ac.jp/ezo/">https://aterui.ws.hosei.ac.jp/ezo/</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	八木 光則  (Yagi Mitsunori)  (00793473)	岩手大学・平泉文化研究センター・客員教授   (11201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小嶋 芳孝  (Kojima Yoshitaka)  (10410367)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・客員教授    (13301)	
研究分担者	岩井 浩人  (Iwai Hiroto)  (10582413)	青山学院大学・文学部・准教授    (32601)	
研究分担者	右代 啓視  (Ushiro Hiroshi)  (30213416)	北海道博物館・研究部・学芸員    (80101)	
研究分担者	鈴木 琢也  (Suzuki Takuya)  (40342729)	北海道博物館・研究部・学芸主幹    (80101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関